1896年ブダペスト建国千年祭博覧会の会場計画について

ON THE SITE PLANNING FOR THE MILLENNIUM EXHIBITION IN BUDAPEST 1896

水野 貴博*

Takahiro MIZUNO

In the 19th century Budapest, two exhibitions were held in the park Városliget. For the first exhibition in 1885, Industry Pavilion was built as the main building at the center of the axial structure of the site, but for the Millennium Exhibition in 1896, History Pavilion, the new main building, should be emphasized more than Industry Pavilion. To solve this problem, a new entrance was planned at the end of Andrassy Street, a radial street which connected the center of the city and the park, and a promenade circuit was introduced to connect all major pavilions in the site. History Pavilion was built as a complex of imitations of several historic buildings in Hungary and placed picturesquely on an island in a lake. After the exhibition, a square was formed at the entrance and the History Pavilion was rebuilt as a durable building. The adoption of a promenade circuit as the main traffic line and an asymmetric picturesque building as the main pavilion was a unique solution at the time, since most of the sites of the world exhibitions in the 19th century were based on classical symmetrical layout.

Keywords : Budapest, Millennium Exhibition, Site Planning, Folly Castle, Circuit Style Planning, World's Columbian Exposition

ブダペスト, 建国千年祭博覧会, 会場計画, 模擬城, 回遊式計画, シカゴ万国博覧会

1. はじめに

建国千年祭博覧会は、マジャル人がカルパチア盆地に定住して千周年¹⁾を記念する行事として 1896 年 5 月 2 日から 11 月 3 日までブダペストで開催された博覧会である。記念行事と博覧会を結びつける提案はハンガリー工業連盟(Országos Iparegyesület)議長ジチ・イエネー(Zichy Jenő)によって 1891 年になされ、当初は万国博覧会としての開催が検討されていたが、最終的には準備期間も考慮され、国内博覧会となった。²⁾一般的な博覧会に見られる産業の進展や世界各地の文物の展示よりも、ハンガリーの歴史や文化に関する回顧的な展示に力が注がれ、内外にアピールされた。

この博覧会は単なる一過性のイベントに留まらず、ブダペストの近代化の画期となっている。1890 年代のハンガリーでは好景気に支えられて多くの公共建築や都市基盤の整備が進められており、³⁾都市整備がこの博覧会の開催と関連づけられて構想されたこともあった。⁴⁾博覧会後には跡地や周辺の整備も進められた。

また、この会場計画には 19 世紀に他の欧米諸国で開かれていた万国博覧会の計画に倣っている点もあるが、同時代の産業よりも民族の歴史を重要なテーマとして扱った博覧会の特殊な性格のため、それまでの外国の博覧会には見られない解決が図られている。

この博覧会の会場に関する先行研究としては、敷地選定までの過程を解明し、会場となった公園の中の橋や遊歩道などの整備をこの博覧会の成果とした Sisa József によるものがある。⁵⁾しかし、この

研究は博覧会場計画の成立過程やその意義についての分析には立ち入っていない。

そこで、本研究は、会場計画の成立経緯と設計理念、会場からその後の跡地の整備に受け継がれた点を明らかにし、さらに 19 世紀から 20 世紀にかけての他国の博覧会場計画⁶⁾との関係を考察し、博覧会場の計画史の中に位置づけることを目的とする。

2. ヴァーロシュリゲトと 1885 年の博覧会

建国千年祭博覧会の会場となった公園ヴァーロシュリゲトは、市の北東に位置している。1813-16 年にフランス出身の庭園家ネビエン・ヘンリック(Nebbien Henrik)によって整備された。(図 1) 都心からのメインアクセスであったキライー通り(途中から幅広くなってヴァーロシュリゲティ・ファショルと名称が変わる)の延長上に円形広場が建設され、遊歩道と湖が整備され、19 世紀の市民の行楽地となった。⁷⁾

キライー通りは都心部で幅が狭かったため、1872-76 年にはこれとほぼ並行する幅広い計画道路アンドラーシ通りがヴァーロシュリゲトへの新たな交通路として建設された。(図 2) しかし、アンドラーシ通りの延長上には湖があって公園内に直進できないため、人の流れを導くために、1881 年に通りの終点から右に向かい、円形広場の背後を通過して、公園外の競馬場に向かうシュテファニア通りが建設された。そのため、アンドラーシ通りの完成後も円形広場付近

本論文は、拙論『二重君主制時代のブダペストの都市計画に関する研究』(東京大学学位論文, 2007) 第 6 章に新たに分析を加えて再構成したものである。

* 跡見学園女子大学 兼任講師・博士(工学)

Part-time Lecturer, Atomi Univ., Dr. Eng.

がヴァーロシュリゲトの中心的空間であり続けていた。

ヴァーロシュリゲトでは1885年にも国内博覧会が開かれている。(図3) この博覧会は「産業館」をメインパヴィリオンとし、産業や技術に関する展示を主としたものであった。会場はヴァーロシュリゲト内のシュテファニア通りと湖より奥の地区(以下、本論文

図1 1827年のヴァーロシュリゲト

図2 1896年のヴァーロシュリゲト

図3 1885年の博覧会場

ではA地区と呼ぶ。図2参照)で、ヴァーロシュリゲティ・ファシヨルの軸線の延長上に産業館を配置し、その手前を整形式庭園、左右にその他の小さなパヴィリオンを配置したものであった。産業館をはじめとしていくつかのパヴィリオンが恒久的建造物として建設され、博覧会後も残された。⁸⁾

3. 会場計画設計競技

3.1 会場決定と設計競技課題

建国千年祭博覧会の会場については、1892年8-9月に博覧会実施委員会の分科委員会で協議が行われた。当初は市の中心を流れるドナウ川沿いでの開催も検討されたが、結局再びヴァーロシュリゲトが会場になり、1885年の会場であったA地区に加えて、シュテファニア通りを挟んだ地区(以下、B地区とする)も敷地に含まれることになった。⁹⁾ この敷地を対象に1893年2月8日から3月31日まで、会場計画の設計競技が行われた。

1891年に万国博覧会として提案された段階から、ハンガリーの「歴史、文化、経済の活力と能力を示す」ことがこの博覧会の目的として掲げられていた。¹⁰⁾そのため、「歴史館」がメインパヴィリオンと位置づけられ、会場計画と同時に歴史館の設計競技も発表された。¹¹⁾

この会場計画設計競技のプログラム¹²⁾では、ヴァーロシュリゲト内に公園として残す部分を確保すること、植栽を可能な限り維持すること、博覧会の開催中もシュテファニア通りの自由通行を可能とし、通りの両側の会場を歩道橋で結ぶこと、1885年博覧会のパヴィリオンを別の用途で再利用すること、実施委員会が建設するパヴィリオン¹³⁾以外に、市や企業のパヴィリオン、ホテルやカフェなどを配置する敷地、式典のための最低2万人を収容できる広場を確保することが求められた。これらの条件を踏まえた上で、既定のA、B地区以外に隣接する地区を敷地に含めることも認められていた。

3.2 応募各案と審査員の評価

応募者は配置図に建物、道、緑地などを示し、解説書を添付することが求められた。計34案が到着し、うち4案が入選とされたが、1位は設けられなかった。¹⁴⁾

各案の特徴とそれに対する審査員の評価¹⁵⁾は以下のようなものであった。

ギエルグル・カールマーン(Giergl Kálmán)とコルブ・フロリシュ(Korb Flóris)による案(図4)は、円形広場に接するように半円形の広場を設け、そこから放射状にパヴィリオンを配置している点に特徴がある。歴史館はA地区の中心軸線から90度右に曲がった方向にあるB地区の中心軸線上に配置されていた。

ゲルシュテル・カールマーン(Gerster Kálmán)、ミルコフスキ・ゲーザ(Mirkovszky Géza)による案(図5)は、産業館の前後にアーケードに囲まれたモニュメンタルな中庭を提案し、式典のための空間としている。さらに、円形広場も会場に含め、その中央に歴史館を配置していた。しかし、そのためにシュテファニア通りを円形広場の手前を通るよう捻じ曲げてしまった点、敷地の現状を考慮せずに公園を大規模に改造している点が審査評で批判されている。

建設会社「ノイシュロス・カーロイと息子」(Neuschloss Károly és fia)の案(図6)は、会場を拡大して湖とその中の島も敷地に含めていた。(以下、この湖周辺をC地区と呼ぶ)この案の特徴は、アン

図4 設計競技ギエルグル&コルプ案

図5 設計競技ゲルシュテル&ミルコフスキ案

図6 設計競技ノイシュロス案

図7 設計競技シッケダントス案

ドラーシ通りの軸線延長上にもエントランスを設け、その延長上の島の中に歴史館を配置していたことである。A地区は産業館、B地区は式典広場を中心に構成し、各地区を曲線の遊歩道で繋ぐことも計画していた。審査評はこの計画の全体を高く評価しているが、難点の一つとして歴史館が提案されている敷地に既存の温泉施設¹⁶⁾がある点を挙げ、この施設の取り壊しは認められないとしている。

シッケダントス・アルベルト(Schickedanz Albert)による案(図7)も、C地区を敷地に含めていた。旧産業館を機械館とし、C地区の湖の背後に新産業館をメインアクセスの軸線と平行して配置していた。B地区ではエントランスの広場から斜めに延びた軸線上に配置し、式典空間としていた。いくつかのパヴィリオンへのアプローチが明快でない点について審査評は否定的であった。しかし、この案の最大の特徴は歴史館を湖の中の二つの島にそれぞれ修道院と城塞のような形状で配置していたことである。審査評はこの構想を「生き生きとした水との関係をもたらした」と高く評価し、アンドラーシ通りから橋を渡ってアクセスできる点も利点と認めている。シッケダントスは、並行して行われていた歴史館の設計競技でも同じコンセプトの建物を提案し、入選4案のうちに選ばれている。¹⁷⁾

3.3 審査過程で注目された点

この設計競技で当初指定された敷地では、明らかに1885年博覧会の旧産業館が最も中心的な位置を占めていた。しかし、建国千年祭博覧会のメインパヴィリオンは新たに建設する歴史館であり、これをいかにして旧産業館より強調するかが会場配置計画の重要なポイントであったことが、各案に対する審査評から推察できる。

また、審査評から、ノイシュロス案の全体計画とシッケダントス案の歴史館の形状の評価が特に高かったことが理解できる。

ギエルグル&コルプ案では、アプローチのシュテファニア通りからA、B両地区それぞれに平等にアクセスできるようにし、歴史館はB地区の中心パヴィリオンとされた。しかし、B地区はA地区に比べて小さいため、やはり旧産業館以上に強調することはできない。ゲルシュテル&ミルコフスキ案は、歴史館を旧産業館より市内に近い位置に配置することでこの問題を解決しようとしたが、そのためにはシュテファニア通りの経路変更が必要になる。ノイシュロス案は旧産業館の軸線とは別に、市内からのアクセスとなるアンドラーシ通りの軸線上にメインエントランスを設け、その延長上のC地区に歴史館を配置することで、この問題を解決したが、既存の温泉施設を取り壊さなければこの計画は実現不可能であった。

ノイシュロス案の問題点を解決する鍵となるのがシッケダントス案であった。敷地条件を生かして歴史館を湖の上の左右非対称の建物として計画することで、軸線上に配置しなくても十分印象的なメインパヴィリオンになり得ることに審査員は注目したと考えられる。このような着眼点は最終的な会場計画に引き継がれている。

4. 最終計画の決定

4.1 審査委員会による会場計画の作成

設計競技が締め切られた直後の4月5日、商業大臣のルカーチ・ベーラ(Lukács Béla)が、B地区の代わりにC地区を利用できないか、ブダペスト市議会で提案した。¹⁸⁾市議会は、博覧会場に恒久的な建物を建設しないことなどを条件に、この提案を承認した。

審査委員会はこの承認を確認して上記の4案を入選とした。そし

て、審査員の構成員のうち建築家や都市計画家を中心とした5名¹⁹⁾からなる分科委員会を設け、この委員会にB地区の替わりにC地区を会場に含め、当選4案のよい点を元に会場配置案を作成させた。

審査委員会は、5月10日付の建築専門紙“Bauzeitung für Ungarn”で分科委員会作成の案の設計コンセプト²⁰⁾を発表した。その内容は、その後5月31日に博覧会実施委員会で承認され、建築専門各紙²¹⁾で発表された図面(図8)とほぼ合致している。温泉施設を除くC地区が会場に含められ、B地区は公園のまま維持されることになった。

4.2 審査委員会案と設計競技入選案との比較

審査委員会案の発表した案には、各案のアイデアを単なる組み合わせではなく、独自の一貫した理念を認めることができる。上述の設計コンセプトと図面から、この案が応募各案から引き継いだ点と審査委員会が新たに構想した点を確認する。

4.2.1 会場のエントランスと環状の動線計画

審査委員会案は、円形広場の奥の旧会場の入り口を第二エントランスとし、アンドラーシ通りの延長上に新たなメインエントランスを設けていた。「会場のメインエントランスはアンドラーシ通りの軸線の延長上、ナードル島(左側の島)の向かいに移される。なぜなら、各地区へのアクセスが容易になり、外観上の効果も非常に高められるからである。メインエントランスとナードル島を幅広い橋で結ぶことで、大量の人流となった訪問客を適切に導くことができる。」(括弧内引用者)としており、会場への主要動線となるアンドラーシ通りの延長上に入口を設ける合理性を述べている。

また、審査委員会案は会場内に環状の遊歩道を設けていた。設計コンセプトでは「メインエントランスの前、すなわち出口にも当たる広場からは、幅広い環状道路が博覧会場全体に配置されなくてはならない。計画の環状道路では、二手に分かれた道の片方が産業館の前を、もう片方がその背後を通ることになる。博覧会の見学をできる限り体系的にするために、重要な建造物はこの道沿いに建設されなければならない。」と述べられており、この遊歩道を巡回路として想定した、いわば回遊式の会場構成が提案されている。

ナードル島には国王の控え室となる「国王のパヴィリオン」を中心にした広場が設けられ、ここから環状道路が分岐している。温泉施設の取り壊しを避けるため、この国王のパヴィリオンへのアプローチはアンドラーシ通りの軸線上ではなく少し右に振れているが、このカーブがそのまま環状道路の曲線に繋がっている。また、池の形状に手を加え、ナードル島の背後を堰き止めて会場の他の部分に繋げている。

設計競技のノイシュロス案もアンドラーシ通りの軸線上にエントランスを設け、会場内の各地区を曲線の遊歩道で結んでいたが、歴史館の脇から始まる遊歩道はエントランスからの動線と適切に結ばれておらず、また式典広場で行き止まりになっていた。これに対し、審査委員会案の環状道路はメインエントランスから一筆書きするように会場を周回し、人の流れを無理なく導いている。この動線計画は、審査委員会案が独自に展開させたものと考えられる。

また、審査委員会案では、アンドラーシ通りの延長上が第一エントランスに位置づけられ、会場の主要動線が環状道路とされていることから、設計競技4案のいずれと比べても円形広場の軸線の中心性が弱められていることが理解できる。

4.2.2 湖の島の歴史館

島の上には歴史館を配置している。コンセプトでは「歴史部門の展示はセーチェニ島(右側の島)の城と要塞に似た建物で行われる。この島と周辺地区はハンガリーの発展の主な時期を反映した建物を建設するための場所とされ、これらの建物は島の内外の会場区画に素晴らしい眺望の効果をもたらすものである。」(括弧内引用者)とし、会場内でこれよりも適切な場所はないとも述べている。

さらに、「これらの島々の絵画的な配置と池を会場に含めることが、記念祭に際して他では得られない効果を確実にする」と、池と島を会場に含むことによってピクチュアレスな効果が得られることが強調されている。

この島の上の城塞を模したパヴィリオンの構想はシッケダント案を反映している。歴史上の各時代を建物の形状に反映させるという展示コンセプトも、シッケダントが歴史館の方の設計競技で述べていた主張で、彼の構想がほぼ受け入れられたと理解できる。

ただし、シッケダントが左右二つの島を歴史館の敷地に想定していたのに対し、審査委員会案では規模を縮小し、セーチェニ島だけを用いている。シッケダントがナードル島に計画していた修道院をセーチェニ島に移し、セーチェニ島全体に想定していた城塞を縮小し、環状道路を挟むよう両者を配置することにより、狭い島の上でパヴィリオンへのアクセスと会場内の循環交通を両立させている。

4.2.3 博覧会場内のゾーニング

審査委員会案は上記のようにメインエントランスをアンドラーシ通りの軸線上に設け、歴史館を池の中に配置することで、歴史館を産業館よりも強調するという設計競技の課題に対してどの応募案よりも適切に回答していた。

これに加え、審査委員会案のコンセプトは展示内容に基づく会場内の配置計画を強調していた。展示は歴史、民俗学、農業、産業、技術、芸術の6部門に分けられ、それぞれ図8のように位置が指定されていた。産業館は1885年の博覧会の旧産業館がそのまま再利用された。なお、民俗学部門は設計競技課題発表と実施計画図作成の間に展示構想が変わり、博覧会の中での重要度が増していた。当初のプログラムでは「民俗学・家内産業館」という一棟のパヴィリオンが想定されていたものが、各地方の農村建築を再現した一つの村をつくり、建物自体も展示物とする計画に変わっている。²²⁾また、芸術館は博覧会場の外のアンドラーシ通りにできるだけ近い位置に恒久的建造物として建設し、博覧会後も美術館として利用することが構想されていた。²³⁾

コンセプトではこの配置の背景となる構想について詳細には述べられていないが、6部門の配置は歴史、民俗学、芸術というハンガリーの文化に関する展示、それ以外の同時代の産業に関する展示に分類でき、前者はC地区とその周辺、後者はA地区の旧博覧会場にほぼ該当している。歴史館を中心としたハンガリー文化展示と産業館を中心とする産業展示の二つを柱とし、文化展示をより重視するという博覧会の理念を、関連する展示を集め、文化展示をメインエントランス近くに配することでより鮮明に表現している。

当時の新聞もこの特性を的確に捉えており、「この博覧会の主催者たちは雛形を模倣するのではなく、歴史的視点と博覧会一般の現代的視点という、この博覧会の特徴の両方を表現するような新しい興味深い計画を提案し、博覧会後のヴァーロシュリゲトの地位向上に

も重点を置いている。」²⁴⁾と論評していた。

以上のように、審査委員会案は設計競技の応募各案を参考にしながらも、応募案のいずれよりも完成度の高い新しい構想を示していた。環状道路を巡回する会場計画、湖の島のピクチャレスクなメインパヴィリオンを採用することで、1885年の博覧会場を含む敷地を全く新しい構成に書き換えることに成功したといえよう。

4.3 審査委員会案から建設までの間の改変

審査委員会による図は実際に建設された会場(図9, 10)にほぼ引き継がれた。それでも実現までの間に若干の変更が見られる。

博覧会実施委員会と市の協議の結果、C地区が広げられ、²⁵⁾湖周辺に水に関係のあるパヴィリオン²⁶⁾が配置された。

また、道路の幅や形状にも若干の変更が見られる。環状道路はア

図8 1893年の分科委員会作成の会場計画図

図9 建国千年祭博覧会場図

図10 建国千年祭博覧会場鳥瞰図

プローチからほぼ直進して会場の奥に向かう道と分岐して歴史館の間を通って産業館に向かう道の幅に差が付けられ、前者が主要動線とされている。また、農業館、機械館などいくつかの左右対称の大きなパヴィリオンの前にあるアプローチの幅が狭められ、軸性が弱められている。

変更点の中でも会場全体の印象に特に影響を与えたのは、いくつかのパヴィリオンの配置と、審査委員会案の段階ではまだ決定されていなかったいくつかのパヴィリオンの形状であろう。

当初、環状道路の分岐点に想定されていた国王のパヴィリオンは実際には建設されず、国王の控え室は最終的に歴史館の中に設けられた。²⁷⁾同位置にはこれに代わる象徴的な建物は配されなかったが、民俗学部門の村の教会(図11)が、エントランスから橋を渡る道筋からの視線のほぼ延長上に配置されている。1893年の計画図では教会らしき建物がもう少し奥まった位置に描かれているため、遊歩道からの眺めを意識して計画を変更したことも推測できる。この教会はカロタセグ地方²⁸⁾マジャルヴァルコー(Magyarvaskő)村のカルヴァン派教会を模したもの²⁹⁾であるが、四隅に小塔を配した急勾配の塔に特徴があり、遊歩道を進む人々の目を引くアクセントとなったと考えられる。

メインエントランスから進んで湖の対岸に見える目立つ位置に、当初の建設予定にはなかった経済・金融・融資館が配置されている。歴史や民俗学の文化展示が中心のこの地区への配置は適切でないように見えるが、建築専門紙の紹介では「この展示は、経済・金融・融資の**歴史的**発展を示す博覧会で示す初めての試みである。そして、これまでのこの種の展示と異なり、幸いにも千年祭の歴史の枠組みにもふさわしいものである。」³⁰⁾(強調原文)とされており、この配置の妥当性が強調されている。このパヴィリオンではかつてハンガリーの経済の中心地だったことを理由に、現スロヴァキアやトランシルヴァニアの歴史的建造物の形状が引用されていた。(図12)³¹⁾このような歴史的建造物からの引用は、歴史館(図13)を踏襲したものと考えられる。

これらの改変を経て、文化展示のC地区には実在する歴史的建造物やヴァナキュラー建築の形状を引用したパヴィリオンが集中した。湖越しや曲線の遊歩道沿いにさまざまな形状のパヴィリオンの織りなす景観が展開し、左右対称のパヴィリオンが並ぶ産業展示のA地区との対比がより際立つようになった。

5. 建国千年祭博覧会後のヴァーロシュリゲト整備

本章では、博覧会後のヴァーロシュリゲトの整備について分析し、会場計画がこの公園の整備に及ぼした影響を考察する。

5.1 英雄広場の形成

建国千年祭博覧会後、会場のメインエントランス付近は「英雄広場」(Hősök tere)に整備された。(図14)この広場は、高い円柱と背後の四分円のコロネードを組み合わせた「建国千年記念碑」(1894-1929)がアンドラーシ通りの軸線上に配置され、その両側を芸術館(1894-96)と美術博物館³²⁾(1899-1906)が囲む構成となっており、これらはすべてシッケダントツの設計で建てられた。個々の建物の建設経緯は彼についてのモノグラフ³³⁾である程度解明されているので、ここでは広場全体の形成の背景について考察する。

英雄広場で最初に計画され、博覧会までに建設された唯一の建物

は、1893年の審査委員会案ですでにこの位置の建設がほぼ確定していた芸術館である。翌1894年1月に市議会が建設を正式決定し、6月にシッケダントツが指名された。彼はこの建物をネオ・ルネサンスにギリシア神殿風の大きなエントランスを組み合わせた折衷様式で設計し、三廊式パシリカのような縦長の平面を採用した。

次に建設が決定したのは建国千年記念碑である。この記念碑の構想自体は1870年代から見られ、1894年1月にこの博覧会のメインエントランスに建設されることになるまでは、会場からは離れたドナウ川沿いの丘の上が敷地として想定されていた。建設にはシッケ

図 11 建国千年祭民俗学部門の教会 (左)
図 12 経済・金融・融資館 (右)

図 13 湖越しに望む歴史館

図 14 英雄広場

ダントツと彫刻家ザラ・ジェルジ(Zala György)が指名されたが、その後建設が博覧会に間に合わないことが判明したために延期され、完成は第一次世界大戦後になった。

最後に、1894年にシッケダントツが指名されていたが、当初はヴァーロシュリグトのもっと内部の敷地が想定されていた美術博物館の建設が1898年に決定した。³⁴⁾シッケダントツは芸術館と似た印象の新古典主義のファサードを採用して広場に統一感をもたらした。³⁵⁾

このようにして円形広場に代わるヴァーロシュリグトの玄関口として英雄広場が成立したが、会場計画と芸術館の位置が決定した1893年の段階で、設計競技審査委員会はこの位置に求心的な構成の広場は想定してはいなかったと考えられる。審査委員会作成の図(図8)では、芸術館はシュテファニア通りを正面にした横長の建物として描かれているからである。³⁶⁾

これに対し、シッケダントツが提案した芸術館の縦長の平面³⁷⁾は、博覧会場のメインエントランス側に正面を向けていた。この平面の変更が、この位置に建物が取り囲む閉じた広場が形成されるきっかけになったと考えられる。

アンドラーシ通りの軸線上の建国千年記念碑を中心に左右対称に見える配置を導入し、通りの終結点として安定感のある造形になっている。広場を構成する個々の施設は別個に計画されたものだったが、結果的にこのような整合性のある空間が誕生したことから、シッケダントツは当初からここに求心力のある古典的な軸線構成の空間を作り出そうとしていたのではないかと推測できる。

5.2 その後の園内整備

英雄広場の背後の湖に架かる橋と遊歩道は博覧会後も維持された。さらに、建設中から仮設建築であることを惜しまれていた³⁸⁾歴史館もその姿を留めることになった。1899年に市が取り壊しを決定したとき、数名の芸術家・建築家により、同じ場所に恒久的な建設手法で建て直して民俗学博物館か市立博物館とし、英雄広場の美術博物館、芸術館と共に新たに美術館地区を形成するという提案³⁹⁾がなされた。これが受け入れられ、1902年に農業博物館としての再建が決定し、1904-08年に改めて恒久的材料で建設された。

その後、湖に架かる橋の延長上にネオ・バロックの大規模な温泉施設が計画⁴⁰⁾されるなど、英雄広場の背後に公園の賑わいの新たな中心地区が生まれた。(図15)一方、シュテファニア通りや円形広場周辺は園内の交通路としての重要性を失い、人の流れが減少して

図 15 戦間期のヴァーロシュリグト

いる。⁴¹⁾第二次世界大戦中の 1944 年の爆撃では農業博物館をはじめヴァーロシュリゲト内の建物も被害を受けた。これらは戦後修復されたが、産業館はそのまま取り壊され、⁴²⁾現在では円形広場も消滅してしまっている。

博覧会後のヴァーロシュリゲトの整備においては、英雄広場で再び古典的な構成が導入されたことに加え、広場の背後に公園を直進して通過する道路も建設されたため、回遊式の構造が維持されたとは言い難い。しかし、会場のメインエントランス付近に園内の中心区画が形成され、さらに会場を象徴する建物であった歴史館のピクチャレスクな演出が再現されたことにより、このイベントの記憶が現在に伝えられている。

6. 19 世紀の博覧会場計画における建国千年祭博覧会の位置づけ

環状道路による回遊式の動線と湖の中のピクチャレスクなメインパヴィリオンを採用した建国千年祭博覧会の会場計画は、19 世紀の博覧会場としては特殊なものであった。これ以前に世界各地で開かれていた他の博覧会と比較し、建国千年祭博覧会の会場計画の源泉と新しい点を検証する。

6.1 回遊式遊歩道と歴史的建造物の引用

建国千年祭博覧会以前に開かれた主な万国博覧会として、ロンドン(1851、1862)、パリ(1855、1867、1878、1889)、ウィーン(1873)、フィラデルフィア(1876)、バルセロナ(1888)、シカゴ(1893)などが挙げられる。これらの博覧会では鉄やガラスを利用した大建築がメインパヴィリオンとして会場の中心に据えられていた。時代が下るに従って、メインパヴィリオンの周囲にいくつもの小規模な建造物が配される例が多くなっていくが、左右対称のメインパヴィリオンや巨大なモニュメントを中心に、その前に軸線を設けるという古典的な配置計画が原則として受け継がれていた。1885 年のブダペストの国内博覧会もこのような先例に倣ったものであったといえよう。

建国千年祭博覧会の会場計画に見られた曲線の動線計画と歴史的建造物を引用したパヴィリオンの前例を他国の万国博覧会に見出すなら、それはメインパヴィリオン周辺ではなく、会場周縁部の各国のパヴィリオンが配されていた区画であろう。1867 年のパリ万博で楕円形の産業宮の周囲に各国の興行的な建物が配置され、それらの建物の外観には異国情緒が漂っていた。⁴³⁾ 歴史館や民俗学部門の村などの国内各地の建造物を引用した C 地区のパヴィリオンもこの文脈に位置づけることができよう。

ただし、建国千年祭博覧会のパヴィリオンは、単なるエキゾティシズムを刺激する娯楽施設ではなく、各時代、各地域の建物をなるべく正確に満遍なく引用して表現しようとする科学的な態度にも基づいている。⁴⁴⁾ 建国千年祭博覧会の会場計画の新しい点は、余興的な存在であった地区を真面目な展示空間として博覧会の中心に据え、それを生かすための配置を生み出した点にあるといえよう。

6.2 自然地形を利用したピクチャレスクな演出

建国千年祭博覧会とその 3 年前に開催されたシカゴ万博の会場計画(図 16)は、会場内にある自然の湖と島を利用している点が共通している。

シカゴ万博の会場は、鉄道の支線が引き込まれて設けられた駅の前に大広場があり、その前に古典的な軸線構造の空間が展開している。軸線の中心には整形された池が配され、その周囲に工業、農業、

機械、運輸、鉱業、電気といった産業展示の大規模なパヴィリオンが整然と並んでいる。一方、その北に隣接する地区には自然の形状を残した湖と島⁴⁵⁾がある。湖の周囲には自国の様式で建てられた外国のパヴィリオンやコロニアル・リヴァイヴァルで建てられた各州のパヴィリオンが曲線の道沿いに配置されている。軸線構造の整然とした地区と自然地形の地区が対比的に配された会場構成はパリやウィーンなどのそれまでの万国博覧会には見られないものであった。

建国千年祭博覧会の会場計画はシカゴ万博(1893 年 5 月 1 日・10 月 30 日)開会直後にほぼ決定している。建国千年祭博覧会関係者や設計競技応募者がこの大規模な万国博覧会の会場計画に開会前から注目しており、自然景観を会場に取り入れる発想もこれを参考にしていた可能性は十分に考えられる。

しかし、シカゴの会場の中心となった空間はやはり大広場周辺の大パヴィリオンが整然と並ぶ地区で、人工的要素を取り入れない湖の島はそれらの建築的壮大さに対しての引き立て役となることが意図されていた。⁴⁶⁾ 建国千年祭博覧会において湖の島に会場の中心となるパヴィリオンを配置して強調し、整然とした軸線構造は 1885 年の博覧会から引き継いだ地区に限定していたのとは対照的である。

シカゴ万博の敷地面積は建国千年祭博覧会の 5 倍以上⁴⁷⁾で、展示パヴィリオンも大規模なものであった。鉄道で訪れる大量の入場者を遅滞なく導くためにも整然とした会場構成を中心に位置付けるのが適切であったと考えられる。建国千年祭博覧会の審査委員会案がシカゴ万博を参考にしていたとしても、このような大規模な博覧会場をそのまま縮小して踏襲するのではなく、規模やテーマの違いを考慮して適切な解決を導き出したといえよう。

7. 結

建国千年祭博覧会の会場計画の課題は、1885 年に行われた博覧会の産業館を中心とした軸線構造を残したまま、新しいメインパヴィリオンとなる歴史館をより強調することであった。この課題に対し、

図 16 シカゴ万国博覧会(1893)会場

設計競技入選各案の構想を取り入れながら審査委員会が作成した案は、既存の博覧会場の形式にとらわれない、催しの趣旨と敷地条件に適したものであった。

市内からの大通りの延長上にメインエントランスを設け、その先の湖を中心区画として整備した結果、エントランス跡地に英雄広場が誕生し、メインパヴィリオンが再建されるなど、この博覧会で生まれた空間構造の一部はその後の公園整備にも引き継がれた。

曲線の遊歩道による回遊の構成、歴史的建造物を引用したパヴィリオン、自然景観を利用したピクチュアレスクな配置計画といった特徴は当時の各国の万国博覧会では周辺の、従属的にのみ用いられていたもので、建国千年祭博覧会において初めて中心的、全体を統括する原理として採用された。

建国千年祭以後に開かれた博覧会では、歴史的建造物やヴァナキユラー建築を模した各国のパヴィリオンがより中心的な役割を担い、会場の中で強調される例がしばしば見られる。セーヌ川沿いに各国のパヴィリオンが並べられた 1900 年のパリ万博がその代表例である。1931 年に同じくパリで開かれた植民地博覧会⁴⁸⁾では、会場となったヴァンセンヌの森に植民地の伝統的建築やフランスが建てた建物を模したパヴィリオンが配置され、回遊することで世界一周の疑似体験ができるよう演出されていた。建国千年祭博覧会は、このような傾向を先取りするものであったと捉えることができよう。

注

- この建国は数年の幅を持って想定されており、当初の 1895 年という目標より遅れて開催された建国千年祭博覧会の準備状況に合わせ、正式な建国年のほうが調整された。
- Magyar Ipar*, 1891, no.4 pp.1-3, no.9 pp.1-3, no.10 melléklet pp.1-12
- 王宮の改築(1881-1902)、国会議事堂(1885-1904)など大規模な公共建築の工事が進行中であった。
- 1890 年代初頭にはドナウ川に架かる新しい橋梁の建設計画と旧市街対岸のラージマーニョシュ地区の開発が構想されていたが、この地区を博覧会場にして開発の起爆剤とする構想もあった。また、建国千年祭博覧会の開会に合わせて会場へのアクセスとなるアンドラーシ通りの下にヨーロッパの大陸部では初の地下鉄が開通している。
- Sisa József, “A Városliget átalakulása az ezredéves kiállítás idején”, *Ars Hungarica*, 1996/1, pp.57-78
- 19 世紀の博覧会場計画の展開に関しては、吉田光邦編『図説万国博覧会史 1851-1942』(思文閣出版, 1985)、吉見俊哉『博覧会の政治学』(中公新書, 1992)などの著作で分析されている。特にパリ万博の会場計画に関しては、三田村哲哉、小林克弘、中原まり、『パリにおける博覧会の変遷に関する研究 1855-1937 年を対象とした配置計画の分析を中心として』, 日本建築学会計画系論文集, 第 519 号, pp.333-339, 1999.5 で、2 本の軸線を中心とした古典的構成が踏襲され続けたことが論じられている。また、1893 年のシカゴ万博の会場計画については、黒川直樹氏の一連の建築学会大会学術講演がある。その他、個々の博覧会の建造物、特に海外の博覧会で建設された日本館については比較的高い先行研究がある。
- この整備については Thaly Tibor, *A 200 éves Városliget*, Budapest, 1958, pp.47-58 を参照した。
- “Az országos kiállítás”, *Magyar Ipar*, 1882, p.295. 産業館以外に芸術館(建国千年祭博覧会では衛生館に転用)、「国王のパヴィリオン」(この博覧会後に喫茶店に転用され、建国千年祭博覧会会期中もそのまま営業が続けられた)が恒久的建造物として建てられた。
- Sisa, *Op. cit.*, pp. 59-61
- Magyar Ipar*, 1891, no.4 p.1
- “Die Millenniums-Ausstellung”, *Bauzeitung für Ungarn*, 1893, p.43. 歴史館設計競技の提出期限は会場計画より遅い 4 月 30 日であった。

- “Az ezredéves kiállítás”, *Építő Ipar*, 1893, pp.36-37
- 歴史館(3000m²)、民俗学・家内産業展示館(1500m²)、公共教育館(1500m²)、衛生館(800m²)、本部館(1000m²)、農業生産展示館(4500m²)、造園館(1000m²)、林業館(1000m²)、ワイン・酒造展示館(1000m²)、クロアチア・スラヴォニア展示館(800-1000m²)、鉱業・製鉄業・建設材料展示館(2000m²)、交通展示館(3500m²)、機械館(10,000m²)、ボイラー・機械修理館(400m²)、警察本部庁舎(350m²)、警備庁舎(400m²)、消防署・住居・倉庫(400m²)、クロークルーム・洗面所・鉄道集荷場・現金警備の建物(400m²)、博覧会小食堂(800m²)、式典館(5000m²)がプログラムで指定されていた。
- 設計競技の審査員は商業大臣ルカーチ・ペーラが指名した。博覧会実施委員長ネーメト・イムレ(Németh Imre)以外に博覧会主任技師、貴族、国會議員、副市長、土地担保貸付銀行頭取、首都公共事業評議会副委員長、建築家、土木技師が名を連ねていた。(“Die Millenniums-Ausstellung”, *Bauzeitung für Ungarn*, 1893, pp.90-91)
- 審査評は“A millenniumi kiállítás területének elrendezésére hirdetett pályázat alkalmával díjazott tervek”, *Építő Ipar*, 1893, pp.119, 123, 127 に掲載されている。
- 1868-78 年にかけて掘削された被圧地下水を利用した施設で、現在のセーチェニ温泉の前身である。シックダント案もこの温泉施設を敷地に含めているが、取り壊しは避けている。
- 歴史館設計競技は特定の敷地を前提としたものではなかったため、応募案の多くは左右対称の長方形平面の建物を提案しており、入選案のうちシックダント案のみが池の中という具体的な敷地を想定していた。(“A millenniumi kiállítás történelmi csarnokára hirdetett pályázat alkalmával díjazott tervek”, *Építő Ipar*, 1893, p.143) その後、彼の提案した設計コンセプトと敷地条件に基づいて第二回設計競技が行われた。(ただし、この設計競技で入選したのは別の建築家であった。)
- “A millenniumi kiállítás területének beosztása”, *Építő Ipar*, 1893, pp.113-115. B 地区を放棄したのは、市民のために公園を残すためとしている。
- 建築家のツィグレル・ジェーゼー(Czigler Győző)、ハウスマン・アラヨシュ(Hauszmann Alajos)、カウゼル・ヨーゼフ(Kauszer József)、都市計画家のレヒネル・ラヨシュ(Lechner Lajos)、工業連盟理事のゲッレーリ・モール(Gelléri Mór)が構成員であった。中でも当時王宮や最高裁判所などの重要な公共建築を手掛けておりハウスマン(1847-1926)、1870 年代からブダペスト旧市街整備計画やセグド市の洪水復興を指揮していたレヒネル(1833-97)は、当時のハンガリー建築界の中心的存在であった。
- “Die Millenniums-Ausstellung”, *Bauzeitung für Ungarn*, 1893, pp.114-116
- Bauzeitung für Ungarn*, 1893, p.145; *Építő Ipar*, 1893, 42-iki rajzmelléklet; *Építészeti Szemle*, 1893, p.301
- この村は、1892 年に民俗学者のザントウシュ・ヤーノシュ(Xantus János)が提案したものであった。博覧会実施委員会がこれを承認し、民俗学部門は建築・内装(家財道具)・衣装の 3 項目の展示を行うことになった。(Szemkeő Endre, “Bevezetés”, Jankó János, *A millenniumi falu*, Budapest, 1989, pp.7-15)
- この位置の芸術館建設は設計競技開催中の 2 月から検討され始めていた。6 月 5 日、博覧会実施委員会は 4 月 5 日のブダペスト市議会の要請に返答し、博覧会場に恒久的な建物を建設しない条件について、芸術館を例外とするよう、また、橋とその延長上の道路も市民の休養に供する設備として会期後も残すよう求めている。“A millenniumi kiállítás területének beosztása”, *Építő Ipar*, 1893, pp.113-115
- “Az ezredéves kiállítás területe”, *Vasárnapi Újság*, 1893, p.407
- “Millenniumi kiállítás”, *Építő Ipar*, 1894, p.465. 広げられた地区は軍事関連の展示に充てられた。
- 漁業館、河川航行・整備館がエントランス右手の湖岸に配置された。
- Bálint Zoltán, *Az ezredéves kiállítás architektúrája*, Bécs, 1897, p.33. 1893-94 年に島の岸辺を敷地として国王館の設計競技が 2 回行われた(第 1 回: “A mű- és középítési szakosztályok tervpályázata”, *Magyar Mérnök- és Építész-Egylet heti értesítője*, 1893, p.207. 第 2 回: “Az 1896-iki ezredéves országos kiállítás királypavillonjának tervezésére másodízben kitűzött pályázatot bíráló bizottság jelentése”, *Építő Ipar*,

- 1894, pp.508-509) が、どの案も採択されなかった。
- 28) 現ルーマニアのトランシルヴァニア地方クルージュ・ナポカ市 (Cluj-Napoca) 西方一帯の地域名。ハンガリーにおける民芸や民族学への注目はこのカロタセグ地方から始まっており、当時ハンガリーの農村を代表する地方とみなされていた。
- 29) “A kiállítási falu temploma”, *Vasárnapi Újság*, 1896, p.8
- 30) “Az ezredéves kiállítás kereskedelem-, pénz- és hitelügyi csarnoka”, *Építő Ipar*, 1896, p.227
- 31) 現スロヴァキアのプレショフ (Prešov) の商家、ケジュマロク (Kežmarok) の鐘楼などの形状が認められる。
- 32) 臨時の展覧会の開催を目的とした芸術館 (Múcsarnok) に対して、この美術博物館 (Szépművészeti Múzeum) は貴族の美術コレクションや新たに購入した作品をもとに設立された常設の施設であった。
- 33) Gábor Eszter, Verő Mária, ed., *Schickedanz Albert 1846-1915*, Budapest, 1996. 展覧会カタログとして編纂されたものである。
- 34) 1899 年に設計競技も行われたが、最終的に採用されたのは 1 位のペッツ・シャム (Pecz Samu) の案ではなく 2 位のシッケダントツの案であった。シッケダントツ案のほうが動きの自由度がより高いという政府の委員の助言で教育大臣グラシッチ・ジュラ (Vlasics Gyula) が決定したと報じられている (Biebauer István, “A Szépművészeti Múzeum”, *Építő Ipar*, 1913, pp.1-3, 13-16) が、当初からシッケダントツが指名されていた経緯とも関係があるのかもしれない。
- 35) ただし、図 14 に見るように、美術博物館の平面は横長の建物二棟を前後に並べ、中央の吹抜けホールと左右の通路で繋いだもので、芸術館とは全く異なっている。また、二つの建物は正確に向かい合ってもいない。
- 36) この建設位置について、当時「我が国では公共建築を外れた場所になるべくうまく隠すように努力している」と皮肉を述べる建築評論家もいた。(Kolbenheyer Gyula, “A millenniumi kiállítás végleges helyszínrajza”, *Magyar Mérnök- és Építész-Egylet heti értesítője*, 1893, p. 124)
- 37) バシリカの平面計画を美術館に応用する発想は、1866-76 に建てられたベルリンのナツィオナルガレリーにも見られるため、これを参照にしていた可能性も考えられる。
- 38) “Látogatás a kiállítási területen”, *Építő Ipar*, 1894, p.531
- 39) “A történelmi épület-csoport ügye”, *Múcsarnok*, 1899, pp.247-250. その中にはシッケダントツも名を連ねている。
- 40) 市の技術局が 1906 年に長円形の広場を取り囲むように温泉、ホテル、温室を配置する構想を立てたが、実現 (1909-13) したのは温泉だけであった。
- 41) 例えば、円形広場は 1916 年にエルジェーベト王妃追悼記念碑の候補地に選ばれているが、その敷地に求められたのは「閑静な」巡礼地であることだった。
- 42) Thaly, *Op. cit.*, pp.134-135
- 43) 吉見, *Op. cit.*, pp.71-72
- 44) このような建国千年祭博覧会の個々の建物の計画経緯と、19 世紀の博覧会パヴィリオンとの展開とハンガリーの建築史におけるその位置づけについては、稿を改めてより詳細に論じる予定である。歴史館の設計経緯については拙稿『ハンガリー建国千年祭 (1896) 歴史館設計過程における文化財に対する認識の変化』 (日本建築学会大会学術講演梗概集, 2006, pp.209-210) でも言及している。
- 45) 日本の「鳳凰殿」が建てられることになるウッデッド・アイランドである。
- 46) 黒川直樹『1893 年シカゴ世界博覧会の景観計画と F.L.オームステッド』 (日本建築学会大会学術講演梗概集, 1996, pp.451-452) ちなみに、建国千年祭博覧会でも、ヴァーロシュリゲトに会場が決定した段階では、植栽を維持するために、島の上には決して大きな建物を建てないよう市から求められていた。(Bálint, *Op. cit.*, p.10)
- 47) 建国千年祭博覧会の敷地面積は 51ha、シカゴ万博は 278ha であった。
- 48) このバリ植民地博覧会の敷地選定と配置計画、その後への影響については Morton, Patricia A., *Hybrid Modernities: Architecture and Representation at the 1931 Colonial Exposition, Paris*, Cambridge, Mass., 2000 (モルトン, パトリシア 長谷川章 (訳) 『バリ植民地博覧会 — オリエンタリズムの欲望と表象』, 2002, pp.121-166) が詳しい。

図版出典

図 1, 15 Thaly, *Op. cit.*

- 図 2 *Budapest régi térképei II.*, Budapest, 2005, DVD
- 図 3 *A budapesti országos kiállítás madártávlatból*, Budapest, 1885
- 図 4-8 *Építő Ipar*
- 図 9 Bálint, *Op. cit.*
- 図 10 Rózsa György, *Budapest legszebb látképei*, Budapest, 1995
- 図 11-13 *Az ezredéves Magyarország és a milléniumi kiállítás*, Budapest, 1896
- 図 14 (英雄広場) Borsos Béla, et al., *Budapest építészettörténete, városképei és műemlékei*, Budapest, 1959
- 図 14 (それ以外) Gábor, Verő, *Op. cit.*
- 図 16 Bancroft, Hubert Howe, *The book of the fair*, Chicago, 1893

(2009年12月9日原稿受理, 2010年4月30日採用決定)